序

世代雑感 二

上脇君は私たち文学青年時代の親しい仲間であった。四十何年のことである。そのころ上脇君は或るロシア文学者のために大学の講義用にするロシア語資料の翻訳を続けた。一方或るロシア文学翻訳家の代訳をしなかなか生計をたてるのだった。だから様縁の力持ちだと私たち仲間は云ってゐた。翻訳もうまいがロシア語で話すことも上手だ。だから、陸軍でも上脇君を徴用してソ満国境方面に連れて行ったことがある。ひところ上脇君がバイコフの作品に興味を持ってゐたのはそのためではないかと思ふ。

上脇君は文学青年時代には主にドストイエフスキーを研究して、すぐれた随筆も書いてゐた。後年、戦後になって発表した随筆もすぐ